

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	安井 俊一
論文審査担当者	主 査	池田 幸弘 (慶應義塾大学経済学部教授 Dr. oec.)	
	副 査	坂本 達哉 (慶應義塾大学経済学部教授 博士 (経済学))	
		川俣 雅弘 (慶應義塾大学経済学部教授 博士 (経済学))	
	面接担当	細田 衛士 (慶應義塾大学経済学部教授 博士 (経済学))	
		穂刈 亨 (慶應義塾大学経済学部教授 Ph. D.)	
(論文審査の要旨)			
<p>安井俊一君の学位請求論文は、書籍としてすでに刊行された『J. S. ミルの社会主義論：体制論の倫理と科学』（御茶の水書房、2014年）である。本書については、すでに『ロバート・オウエン協会年報』『イギリス哲学研究』『経済学史研究』誌上において、書評が公開されていて、それらの書評を一読する限りでも斯界では一定の評価を得た著作だといえよう。以下、まずは本請求論文の章立てにしたがって、内容の要旨を述べる。続いて、論文の評価を行う。</p> <p>第一章は、タイトルが示すように、青年期ミルの思想形成を扱ったものである。よく知られているミルの精神の危機などが手際よく紹介されているが、そのなかにあってミルのハリエットにたいする「異常な従属関係」(p. 65)が主張される。この点は、既存の伝記ではすでに指摘されていると安井君はしているが、基本的には独自の論点を形成すると考えられる。この点、後述。なお、本章では、安井君は、ハリエットは「『経済学原理』の一章・・・を書き」(p. 67)とし、この部分の実際の執筆者はハリエットだと主張している。</p> <p>第二章は、トムプソンやオーエンなどの古典的著作とミルの社会主義論との関係が問われている。ほかにも、サン・シモンやその弟子の著作が扱われる。当該章は長大であるが、結論として「ミルを社会主義者であると言い切るのは疑問であろう」(p. 171)としている。</p> <p>第三章は、短いが、安井君の本学位論文のなかでは重要な役割を演じている。ここでもハリエットとミルとの関係が主題である。ここでは、安井君は「第7章を除く大半部分は彼女が下書きし、一部彼女が口頭で説明しているものをミルが清書」(p. 188)したとしている。</p> <p>第四章では、『論理学体系』とミル社会主義論との関係を扱う。章の冒頭で言及されているように、前者がミル思想体系のひとつの幹を形成していることは研究史上、さまざまな形で指摘されてきた。本章は、そのような指摘を受け、とくに前者の「アートと科学」の関係をめぐる方法論的視点を、ミルの社会主義論に適用しようとするものである。</p> <p>第五章では、ミルの白鳥の歌である遺稿「社会主義論」を分析の俎上にのせる。安井君の立場は明確で、遺稿はそのまま素直に読むべきだというものである。本章では扱われる</p>			

二次文献は、ブリス、アシュリ、シュンペーター、シュヴァルツ、ロビンス、キャパルディ、ホルンダー、邦語文献では、杉原、馬渡、早坂などきわめて多岐に及んでおり、詳細な論評が加えられる。

第五章までが本論だとすれば、第六章、第七章は、全体の行論のなかでは補論的諸章と位置づけられる。第六章では、一介の仕立て職人であるエッカリウスのミル批判がとりあげられる。この章での安井君の対処は、当該論文は「エッカリウスの名前のもとにマルクスがミルを批判している」と (p. 292) 解釈できるというものである。この点については、ハリエット、ミル関係と同じく、authorship の確定の問題である。第七章はこれを受けて、ミルが存命であったら、どのような形でマルクスに反論したのであろうか、という仮定の問題を扱う。この二章の意義付けについてであるが、研究を始めた当初の安井君の問題意識のなかには、既存の研究者で言えば杉原四郎氏などにおいて典型的な形で見られるような、古典的ともいえるマルクス・ミル問題が潜んでおり、厳密に考えれば、本学位論文の主題とはやや異質の論点ではあるが、一書にまとめるさいに、この二章を入れたものと考えられる。とくに、第七章では、戦後日本におけるマルクス思想の絶頂を知る著者にとっては、書かれるべくして書かれた章であったと考えられる。ここでは、ミル思想の正当な評価にさいして、かえってマイナスに作用したマルクス主義のあり方が問題とされているのである。第八章は、結論的な章であり、ミルは共産主義には批判ではあったものの、私有制については「その原理と制度のもたらす弊害の改善の可能性をみている」 (p. 341) とする。この社会主義と資本主義にたいする両面批判が、ミル思想の最大のポイントだというのが、安井君の結論であり、また、同君が規範的な意味でもっとも高く評価するミル思想の特質であると解釈できる。これらの章では、同君の研究歴やあるいは同君自身の規範的な立場がほのみえ、その意味でも興味深い。

以上の要約をふまえて、以下、学位請求論文の評価に移る。安井君が詳細に論じているように、これまでも、ハリエットとミルとの関係については、さまざまな論点が指摘されてきた。全体を通じて同君の見解は、先行する研究者でいえばジェイコブスのそれに近いように見受けられるが、この論点を深めるさいに払われた労力には非常に大きなものがある。とくに、上記のごとく、安井君は二人の関係を「異常な従属関係」とし、ミル研究に新しい論点をもたらした。幼きときの父ミルへの従属、長じてからはハリエットへの従属と、ミルについてはさまざまな「従属関係」の指摘が可能で、これはミルという思想家を今後考えるさいに重要な論点となりうる。このような関係の論証は難しいものの、まずはこの点を先行研究以上にミル解釈上の重要問題として指摘したのは、ミル研究という立場から見た場合の本学位請求論文の大きな成果であると思料される。しばしばそういわれるように、さまざまな著作に見え隠れする、よく言えば博引傍証、

悪く言えば両論併記的なミル思想の特質が、このような人的関係に依存するとすれば、それ自体大きな興味を誘う指摘である。

同時に、残された論点も少なからず存在している。一点目はまさに上記の安井君の貢献にかかわる点である。この問題にも精通していたハイエクの言葉を借りれば、「慎重にそして注意深く言葉を選んだ」ミルが、恋愛関係にあり、通俗的にいえば恋は盲目というような精神状況にあったとしても、間違いなく後に残るような著作において、自分の考えにそぐわない文言を残すだろうかという疑問がある。すなわち、ハリエットの考えは、十分に咀嚼され、理解され、受容された上で、『原理』にとりいれられたとはいえないだろうか。ミルはよく知られているように、軽率な人間ではないのである。

さらに、思想史研究上の技術的な問題がある。くしくも、本論文のなかには、二つの **authorship** 問題が存在している。ひとつは、全体を貫通するハリエット、ミルの間の問題である。もし、安井君が主張するように、前者が本当に『原理』の一部を書いたのであれば、それは示されなければならない、もしくは証明されなければならない点である。この点を確認するのは現時点では困難なのだろうが、安井君の述べ方は章によっても若干のニュアンスの相違があり、かならずしも一定しない。同じことが、エッカリウス・マルクス関係についてもいえる。この問題については、マルクス研究者の間ではすでに対応があり、トマス・マルクスハウゼンの論文などがある。この論文は、本学位論文執筆時でも利用可能だったはずであり、このような重要な二次文献にたいする言及を欠いているのは遺憾である。職人であるエッカリウスがこのような論考を書けたはずはない、という議論は現在、**authorship** の同定、確定についてなされているさまざまな議論の水準に鑑みれば乱暴の感を免れない。安井君が、さまざまな分野で行われている文体分析などについて定量的、計量的な手法についてまったく関心を示していないのは残念である。さらに、このような問題に対処するには、本研究のように公刊されたものだけにあたるのでは十分ではない。実際にどの程度役に立つかはわからないが、さまざまなアーカイブ資料にあたる必要もあったであろう。これは、時代、領域、とりあげる人物を問わず、現在の学史・思想史研究にとっては常識化している手続きである。

また、第四章では、『論理学体系』とミル社会主義論との関係が問われているが、全体としてアートと科学との関係は言及されているものの、功利主義的な「アート」（＝最大幸福原理）を実現する手段としての経済学等の位置づけは分かるとしても、とくに社会主義論が同著の読解を前提にしなければならないゆえんは、必ずしも十分説得的には論証されてはいない。

とはいえ、書籍の形で刊行された学位論文がばらばらに書かれた論文を集めたものではなく、ミル社会主義論という首尾一貫した主題をめぐって書かれており、いままで縷々

論文審査の要旨

No.4

のべてきたように、全体として主張すべき命題が明確に提出されていることは多としなければならない。本学位論文はチャレンジングな企てである。今後、ミルの社会主義論を論じる場合は、安井君のこの研究成果に触れない訳にはいかないだろう。議論のさらなる展開や、批判、そして安井君の応答が待たれるところである。このような点を総合的に評価したうえで、審査員、面接担当者は全員一致で、本研究がミル研究、社会経済思想史研究に寄与するところ大であると判断し、博士(経済学)にふさわしい貢献であると認めるものである。